

**3月の遊歩道**

今月は下記の3人が  
執筆を担当します。  
【数字は掲載予定日】

野口 真一さん  
(泥土リサイクル協  
会グループ統括)



【2・14】

中村 守朗さん  
(樹替代表取締役)



【7・16】

藤本 和弘さん  
(三重県農水商工部  
観光政策監)



【9・23】

**遊歩道**



インターネットで「リサイクル」を検索すれば、約二千七百万件の情報がヒットする。これに「泥」というキーワードを追加して再検索すると、その情報は約百分の一に絞り込まれる。建設業界にとってはこの百分の一こそがリサイクルの残された課題である。

この「泥」について本紙読者の皆さんはどのようなイメージを持っているのか。それは恐らくあまり良いものではないはずである。

例えば、「泥酔」。大辞泉によれば「正体をなくすほど、ひどく酔つこ」と記されている。また、「泥棒」は「人の物をぬすむこと。また、そ」

**「泥」資源考**

野口 真一

例えては、「泥酔」。大辞泉によれば「正体をなくすほど、ひどく酔つこ」と記されている。また、「泥棒」は「人の物をぬすむこと。また、そ」

「泥」が付いたとも言われている。このことがさらに悪い例えとして引用され「顔に泥を塗る」

野口 真一

絶世の美女、クレオパトラも愛用した「死海の泥パック」は、顔に泥を塗ることです。その泥が持つ豊富なミネラルの効果により美貌を保ったと言わ

れている。このことは、現代医学においても科学的に立証されている。

このように本来、泥は悪いものではない。ましてや「建設汚泥」としてひとまとめで「汚」を付けるのはいかがなものか。

リサイクル促進に関する知識や技能・技術を持つて、安全・安心な再生材となるよう、適切な処理を行えば、泥もりっぱな資源である。

次稿では「泥」の固定観念を払ってほしいうえで、一読いただきたい。(泥土リサイクル協会グループ統括)